

INTERVIEW

山と職人と住まい手をつなぐ
伝統構法の家づくりに取り組む



一般社団法人ワークショップ「き」組
松井郁夫 代表理事

ワークショップ「き」組では、03年の設立以来、職人が培ってきた技術を活かした、伝統的構法による家づくりの普及に取り組んでいます。

メンバーは、全国の木材産地や設計者、工務店で構成されており、現在15社で活動しています。

住まい手を中心とした木材産地や職人、設計者との直接契約による協働の家づくりが特徴です。直接契約により価格や仕事の流れがよく見え、住まい手にとっても納得した家づくりができます。例えば、工事費用が2800万円〜3700万円の場合なら設計料はその16%というように明確に決まっております、適正価格による家づくりを実現しています。

国産材による木組の家を推進

木材はメンバーである静岡と徳島

の産地から直接仕入れていきます。産地からは単に国産材というだけでなく、天然乾燥により強度や品質に優れた木材の提供を受けています。

直接仕入れにより途中の流通を省くことで、その分を産地に還元し、施業や植林に活かすことができます。

家づくりについては、金物を極力使わない伝統構法にこだわっています。軸組をあらわしにした、柱や梁が見える真壁の家です。

人が木を一本一本刻み、木と木を組む継手・仕口といった接合部は、金物に頼らなくても地震や台風に対しても粘り強い架構をつくります。

こうした木組みで建てる家は、組んでは外すということができ、移築や再生も可能なのです。

最近では木造住宅でもプレカット材を使うことが多くなっていますが、機械によるプレカットでは複雑な継

手・仕口はつくれません。ワークショップ「き」組には、優れた大工技術を持った大工職人が参加しており、材木を刻んで継手・仕口をつくります。

一方、設計者はそうした大工技術を理解し、住まい手のライフスタイルや要望に合わせ、大工の技術が発揮されやすい形にまとめあげるのが仕事です。また、現代の家づくりでは複雑な法規に対応する必要がある、そういう点でも大工と設計者との分業が必要になります。

木材産地と大工職人、設計者が信頼関係を築くことで、共存共栄の住まいづくりを実現しています。この仕組みが評価され、04年にグッドデザイン賞を、08年には長期優良住宅先導的モデル事業にも採択されました。

職人が培ってきた技術を学ぶ

ワークショップ「き」組では、木組の家を学びたいという設計者や施工者に向けてゼミナールも開催しています。

在来工法による職人が培ってきた木を組む技術を学び、さらに美しい日本の風景を取り戻すためにデザイ

ンの習得を目指すものです。すでに7年ほど継続して開催しており、それまでの成果をまとめた私家版「仕様書」も作成しました。

ゼミナールは、長期優良住宅に対応する高い実践力を身につけることができるプログラム構成となっています。今では受講生による実践事例も全国に増えてきました。

私の生まれ故郷の福井県大野市は、かつては城下町だったことから、古いまちなみが残っていました。私自身、昔ながらの古い町家で育ったこともあり、東京に出てきてまちなみの重要性に改めて気づき、都市計画を学んだくらいです。まちなみ保存や古民家再生を通じて、伝統的な木造の大工技術に触れ、そうした匠の技を新築にも活かしたいと思うようになりました。ワークショップ「き」組を設立したのも、木組の家づくりを通して、美しい日本のまちなみを再生したいという思いがあったからです。

木は加工しやすく長持ちする素晴らしい素材です。今後も伝統的な大工技術と国土保全につながる木材の循環の仕組みから、日本の家づくりを考え、木組の家を未来につなげていきたいと考えています。